



ライフプランニングの大切さ

新潟県小学校長会 福利部長 遠藤 英和

「生き抜く力」を育てる教育の時代になりました。日々「人を育てる大切さ」を学びながらも、背景にある超高齢化社会の到来を見据え、私たち教職員も自身のライフプランをしっかりと描く大切さを学ぶべきだと思うようになりました。

「人生百年時代」という言葉が世の中に生まれる傍らで、社会保障の財源は乏しく、年金制度の行く末も案じられるようになりました。そして、教職員の多忙化が叫ばれる中、私たちの給与制度・休暇制度・福利厚生に対しての措置はおざなりになっていないでしょうか。

これは、行政が措置を講じないとか情報サービスがないということではないと思います。そして、教職員自身が、自分のライフプランを考える余裕をもてないで、日々の職務遂行に当たっていると思うからです。

退職間際になって、この後どう生きていけばよいのか慌てなくてすむように、今年度、ライフプランセミナーの充実を福利部活動の柱の一つに掲げました。具体的には、教職員全員が自らのキャリアデザインにかかわる研修の場を創る運動です。そのために、新潟県・新潟市教育委員会に働き掛けを始めました。

教職員が教育現場に勤務するという仕事のすばらしさを再認識し教職人生を見通すこと、人との出会いを大切にすること、社会の仕組み・法令と手続き・子育て支援・給与の仕組み・活用すべき福利厚生等を熟知し、併せて情報収集の仕方を理解することがねらいです。

輝く教職員が、子どもたちの未来を創ります。みなさんの描くキャリアデザインが、あなた自身を育てるのです。

大会の概要

全連小・佐賀大会報告

第六十九回全国連合小学校長会研究協議会佐賀大会が、十月十二日・十三日の両日、佐賀市を会場に開催された。全国から二千五百名超の会員が集まり、新潟県からも四十八名が参加した。

本大会では、第六十五回三重大会から続く大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」が掲げられた。そして、これまでの四年間の研究の成果と課題を受け継ぎ、大会主題のさらなる究明を目指し、「志を胸に高きに和して 未来を創る 子どもを育てる 学校経営の推進」が副主題として設定された。

一日目の午前は開会式のあと、文部科学省大臣官房審議官の白間竜一郎氏より、新学習指導要領の徹底のために、職員一人一人が総則を確認する必要性や外国語教育にかかわる教材の充実、そして八月末に示された「学校における働き方改革に係る緊急提言」等について詳しい説明があった。

午後は五領域十三分科会に分かれて研究協議が行われた。本大会では各分科会の趣旨や研究の視点、発表内容があらかじめホームページで公開され、

参加者は事前に読み込むことができた。「校長の役割と指導性」についてグループで検討する場が設けられ、分科会毎に「キーワード・キーセンテンスでまとめる」という工夫もなされていた。二日目の全体会では、研究協議のまとめとして次の重要性が確認された。

○ビジョン提示

○綿密な計画立案

○中堅リーダー育成

○組織力活用

○困難に立ち向かう意思と実行力

○教員集団の凝集性

その後、八項目の決意が大会宣言として確認された。

シンポジウムでは、中島潔氏（画家）、内山俊哉氏（シニアアナウンサー）、酒井田柿右衛門氏（柿右衛門窯当主）の三氏から「未来を創る子どもたちに」をテーマに各氏の体験をもとにした「あたたかさ」「つよさ」「しなやかさ」についてのお考えを拝聴した。

閉会式では、次期研究協議会が、函館市で開催されることが確認されて本大会が終了した。

大会の概要

関ブロ・神奈川大会報告

第六十九回関東甲信越地区小学校長研究協議会神奈川大会が、横浜市を会場に六月十五日・十六日の二日間の日程で開催された。参加総数は千名を超え、本県からは四十八名の会員が参加した。

全連小大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の下、理念を更に推し進めることを目指して、副主題「夢や希望をもち、たくましく未来を切り拓く子どもを育む学校経営」が設定され、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性について協議した。

大会一日目は、開会行事と記念講演が行われた。前田好文関東甲信越地区小学校長研究協議会会長は、「校長は自らの学校マネジメント力を高め発揮し、地域社会と共にある学校を創造しなくてはならない。」と力強く挨拶された。「県都だより」では、本県の取組として柳恒雄県小学校長会副会長が、緊急事態に適時対応できる体制の整備、包括的権限移譲に伴う新潟市小学校長会の独立性を考慮した活動の見直しについて報告した。

続く記念講演では、「笑いを引き出す話し方」と題した、十日町市出身の初代桂歌助師匠による講演を拝聴した。師匠は、笑いは健康・美容と人間関係円滑のもとと考え、様々な活動をされている。軽妙なトークと落語で会場は笑いの渦に包まれた。

二日目は、五領域十二分科会二十四分散会に分かれて研究協議が行われた。新潟県からは、二名の会員が研究発表を行った。研究・研修分科会では、高橋豊三条市立栄北小学校長が「小中一貫教育と職員の指導力の向上」について、特別支援教育分科会では、三浦一富佐渡市立小木小学校長が「インクルーシブ教育システムの構築に向けた校長のリーダーシップ」についてそれぞれ提言した。

各分散会では、提言について協議を深め、学校経営の戦略に生かすという本大会のねらいに沿った、充実した時間となった。

最後に第七十回関ブロ大会が長野市で開催されることを確認し合い、本大会が終了した。

上越地区小学校長研究集会報告

○期日 平成二十九年九月十五日(金)
○会場 リージョンプラザ上越ほか

上越地区小学校長研究集会は、上越市のリージョンプラザ上越のコンサートホールを主会場として、午後日程で開催された。

開会式は、横山正夫上越大会副実行委員長の開会宣言に続いて、大野雅人県小学校長会会長が「道徳の教科化に向けて万全の準備ができるよう、県内四百九十六の小学校での取組の現状と課題を十分に協議し、本研究集会が半年後に迫った取組の起点となるよう、実りある研修としよう。」と挨拶した。次に、高橋雅史上越大会実行委員長が「道徳の教科化にかかわる取組がより充実したものとなるよう、校長として私たちは何をしなければならぬのか、活発に議論し深め合おう。」と呼び掛けた。

当日は、来賓として宮野正則上越教育事務所長様、野澤朗上越市教育長様、小林晃彦県中学校長会副会長様に御臨席いただいた。宮野所長様からは激励の言葉を賜り、野澤教育長様からは村山秀幸上越市長の祝辞を代読していただいた。

開会式に続いて、中嶋賢一県小学校長会研修副部長による大会主題「未来

を生き抜く知を磨き 絆を強め 学び続ける子どもを育てる学校経営」の学習指導要領への対応を中心に「の趣旨説明があった。

これを受けて、リージョンプラザ上越、ワークパル上越、上越市教育プラザの三会場に分かれて、道徳教育推進のための五つの視点「組織マネジメント」「カリキュラムマネジメント」「授業づくり」「チーム学校」「インクルーシブ教育」に基づく各十グループによる研究協議を行った。

本大会では、各自が「校長を主語」とした実践レポートを作成し、その実践事例集を事前に読み込んで協議に臨んだ。いずれのグループでも、校長自らの実践に基づく活発な意見交換がなされ、大会主題に迫る質の高い研究集会となった。本大会での協議を生かし、創意と活力に満ちた学校の創造に向けて、計画的に実践を重ねていくことが重要であるとの認識を一層深めた。

本大会の開催に御支援をいただいた関係各位、会場を提供いただいた上越市及び上越市教育委員会に深甚なる感謝を申し上げたい。

中越地区小学校長研究集会報告

○期日 平成二十九年十月四日(水)
○会場 十日町市市民会館ほか

「他校の情報をたっぷりと聞くことができてよかった。道徳の教科化に向けた準備にさらに取りかかりたい。」

これは分科会の最後に、多くの参加者から出された感想である。

「未来を生き抜く知を磨き 絆を強め 学び続ける子どもを育てる学校経営」新学習指導要領への対応を中心に、の大会主題の下、中越地区研究会に地区会員百六十九名が参加し、開催された。来年度全面実施を迎える「特別の教科 道徳」に校長としてどう対応していくかを中心に研修を行った。

開会式では、島田敏夫大会実行委員長が、「喫緊の課題である道徳の教科化に向け、他地域の実践に学び、議論を重ねることは、自校の学校経営を振り返り、新たな視点を獲得する貴重な機会である。」と挨拶の中で研究集会の意義を述べ、柳恒雄県小学校長会副会長も、その意義を強調した。来賓として、丸山辰志中越教育事務所長様、十日町市長代理村山潤副市長様、上村憲司津南町長様他、多くの方々から御臨席いただき、激励並びに御祝辞を頂戴した。全体研修では、岡村秀康南魚沼市学習指導センター嘱託指導主事様から、

「特別の教科 道徳」への取組と授業をアクティブに変える」を演題とし、御講演をいただいた。特に、授業をどう変えるか、評価をどうするかの視点から、色紙を使って考えを視覚化する自作のアイテムを活用した具体的な内容が参考になった。

分科会は、「学校における指導体制の充実」「道徳の指導計画の改善」「特別の教科 道徳」授業の指導方法・評価」「家庭や地域社会等との連携」の四分科会二十五分散会に分かれ、少人数で協議した。各自のレポートをCDで事前配付する方式を踏襲したこと、KJ法を活用したこと

とから、現状や課題、取組実践等、参加者から活発な意見が出され、大変実り多い協議ができた。

本集会に当たり、これまで十日町市・津南町の会員二十一名で実行委員会を組織し、準備を進めてきた。当日は会員の協力により予定どおり終了することができた。本集会の開催に御支援をいただいた皆様に感謝申し上げるとともに、この成果が各学校に活かすことを期待する。



下越地区小学校長研究集会報告

○期日 平成二十九年十月五日(木)
○会場 村上市教育情報センターほか

下越地区小学校長研究会が、早秋の心地よい天気の下、村上市教育情報センターを主会場に、午後日程で開催された。

大会主題は「未来を生き抜く知を磨き 絆を強め 学び続ける子どもを育てる学校経営」で、副題は間近に迫った新学習指導要領の実施を見据え「新学習指導要領への対応を中心」とした。

今年度の研究会では、喫緊の対応が求められる「道徳教育」に焦点を当てた。各校長が実践を持ち寄り、十名程度の分散会において、少人数で討議し合うことを基本方針とした。

開会式では、近藤朗県小学校長会副会長から「本日の協議では、校長を主語として、自分の実践を見つめ直し、より深化させる糸口を見いだしてほしい。」との挨拶があった。

続いて、鈴木正美大会実行委員長が歓迎の言葉を述べた。要項を入れた紙袋は「おもてなしの心」を表すために、地域の協力を得ながら村上市岩船郡の実行委員が七月から手作りで作成した

ことが紹介された。

次に来賓として、井上正裕下越教育事務所長様、吉田隆新潟市教育委員会学校人事課長様、高橋邦芳村上市長様他、多くの方々から激励を頂戴した。

全体研修の時間を設け、若林靖人下越教育事務所学校支援第2課指導主事様から「新学習指導要領で求められる道徳教育の在り方と校長の役割」と題して基調講演をしていただいた。

分科会は、道徳教育にかかわる「組織マネジメント」「カリキュラムマネジメント」「授業づくり」「チーム学校」の四つの視点に分かれ、二十の分散会で協議を行った。協議時間は一時間十分程度と短かったが、会員が事前にCDで配付されたレポートを読み、課題意識をもって臨んだこと、基調講演の内容を踏まえて議論したこと、活発に意見交換し合い、中身の濃い情報交換ができたとの声が多かった。

本研究集会開催に御支援をいただいた関係各位に感謝を申し上げるとともに、今後も新学習指導要領実施に向け、深まりのある議論ができることを期待する。

郡市だより

地域に根ざした教育を目指して

東蒲原郡小学校長会

山紫水明の地東蒲原郡は、明治十九年まで福島県に属し、会津藩の影響を色濃く残す独特の歴史・文化を培ってきた。そのような特色ある「故郷」への誇りと愛着をもつ子どもの育成を目指し、七名の小学校長で地域と密着した活動を行っている。

連携し力強く水をとりえて

郡校長会は、阿賀町の県立中学校一校を含む三校の中学校の校長と共に十名で行っている。少人数だからこそ日頃の密接な連携を図っている。その一つとして、阿賀野川で毎年開催されるレガッタ大会に校長会チームとして三年連続で参加している。息の合ったチームさばきである。

毎月の校長会では、会場校の教育活動を発表する時間を設け、また、それぞれの学校の現状を述べる時間を設定し、課題を共有している。真摯な意見交換は、教育の今日的課題をチームとして受け止め、教育活動を力強く進める推進力を生み出している。

その例として、今年の七月に行われた「阿賀町子ども未来フォーラム」町の未来をみんなで考えよう」が挙げられる。これは、「主体的・対話的で深

い学び」を広く郡内の子どもたちがかわる場で共有したいと考えた、郡内の高学年担任が企画したものである。その思いを小学校長会として受け止め、指導や助言などの全面的なバックアップを行った。

「地域を愛し、地域を担う志をもつ子どもの育成」は、膝を突き合わせて真剣に議論する町長や教育委員を交えた年三回の懇談会の場でも、喫緊の課題である。この課題は、毎年、下越教育事務所学校支援第1課長を講師に招いて行う学校運営研修会でも、代表校長が行う学校経営の発表の重要なテーマの一つとなっている。

豊かな流れを引き継いで

阿賀町は、児童数の減少により平成三十一年度に七つの小学校が三校に再編される。二十年前には十二校あった小学校が四分の一となってしまうのである。近隣の校長会との連携を模索しながらも、各学校が大切に育ててきた地域に根ざした教育活動を引き継ぎ充実させていく舵取りを、東蒲原郡小学校長会として確実に果たしていきたい。

学校紹介

開校百五十年・日本最初の公立小学校
創学の心を今、未来へつなぐ

小千谷市立小千谷小学校

小千谷小学校は、明治元年十月一日に開校した日本で最初の公立小学校として知られる。現在、約九百名の児童が、教育目標「心をみがく」の下で、伸び伸びと学んでいる。今年、開校百五十年を迎え、保護者・地域の方々と記念事業を推進している。

江戸から明治に大きく時代が変わる

慶応四年、戊辰戦争で長岡城下が焼け野原となり、路頭に迷う長岡藩士の子弟などが小千谷に逃げ込んできた。その子どもたちを保護して教育しようと縮商の末裔・山本比呂伎が、建白書をしたためて柏崎県知事に願ひ出る。

「子どもに罪はない。みんな同じ日本の子ども。しっかり教育すれば、維新の世の中を築く立派な人になる。これからは、誰でも学べる公立の学校が必要だ。」と。学校運営資金として、私財千両を五年間に分けて上納する旨を添えてのことであった。山本翁は、新しい時代を見据え、立場や身分を超えた共生理念の下、「敬みて五教を敷いて寛に在れ」と、急がず徐々に、天性の真である人としての徳性を育てていく人間教育を大事にした。山本翁は、小千谷の生んだ維新の教育の先覚者で

あった。

六年生は、慈眼寺、五智院、西軍墓地などを訪ねて歴史を学び、記念式典では、劇「学校の創生」を演じた。

山本翁の「創学の心」は、百五十年もの間、連綿として受け継がれ、未来を生きる子どもたちによって語り継がれてきている。

そして、この「創学の心」である山本翁の教育観は、現在も谷小教育の底流を成している。それは、一人一人の個性を尊重しつつ、その子の可能性を最大限に引き出そうとする教育であり、心を育てる教育であり、困難に屈しない教育である。その風土は、谷小に勤める教職員をも育てるのである。

